

美の鑑賞

小 松 省 三

1 美の定義と種類

(1) 美の定義

美とは

人の心を清らかにし、心に安らぎと安定を与えてくれるものであり、人の心を慰め、生きる
勇気と希望を与えてくれるものであり、人の心を豊にし、新たなエネルギーを与えてくれるも
のである。

(2) 美の種類

a. 自然物の美しさ

花, 鳥, 山などの美しさ

b. 自然現象の美しさ

日の出や夕焼け雲などの美しさ

c. 美術作品の美しさ

絵画, 彫塑, 庭園などの美しさ

d. 生活環境の中の造形作品の美しさ

食器, 車, ドレスなどの美しさ

e. 人体の美しさ

人体そのもの及び動きの美しさ

f. 人格の美しさ

精神及び行動の美しさ

2 美の鑑賞

(1) 鑑賞とは何か

美の鑑賞とは、自然や美術作品などの持つ良さや素晴らしさを理解し、味わうとともに、新たなエネルギーを補給する行為である。

(2) 鑑賞の目的と意義

人間は、日々の生活の中で、新しいものを創造したり、現状を維持したり、過去を捨てるために神経とエネルギーを使っている。だから、時々神経を休ませたり、新しくエネルギーを補給しなければ、人間の心は干からびてしまい、ただ物欲に生き、マンネリズムの中にどっぷりと漬かり、ただただ生き長らえているだけの存在になってしまう。

人間は、決してそうあってはならないと思う。そういう存在にならないためにも、心に安らぎを与え、潤いを与え、新しいエネルギーを与えなければならない。

鑑賞活動は、人間が人間らしく生きて行くために必要な行動形態の1つであり、人間が人間らしく生きて行くために、神様が、人間に与えてくれた素晴らしい生活の知恵でもある。

まさしく、ここに、鑑賞の目的と意義が存在するのである。

(3) 対象物と鑑賞者との関係

極端にいうならば、対象物は、何もせずただそこに存在するだけであり、自由気ままに、自由奔放に行動しているだけである。

それらを見たり、きいたり、触れてみて、何の感動や感激も受けない人もいれば、その対象物から多くの素晴らしい感動や感激を受け、刺激を受け、いきいきとよみがえる人もいる。

これは一体どういうことを意味しているのだろうか。それは、鑑賞とは、人間の精神(感性や知性など)と対象物の価値(輝きや力など)との出会いであるから、感性や知性などの所有の多い人程、多くの輝きや力を得る機会が多く、逆に少ない人は、輝きや力を得る機会が少ないことを意味している。

厳密にいうと、対象物にも、美や価値や感動を与える要素などの含有の多い少ないがあるが、それよりも何よりも、それを受ける側の受信機や受像機の機能や能力が落ちていたらどうすることも出来ない。ましてや、はじめから受信機や受像機のスイッチを切っていたら、これは如何ともしがたい。しかし、努力もしないで、最初から、自分には感受性がないから駄目だなど

美の鑑賞

とあきらめてはいけないと思う。感受性の高まるトレーニングをしたり、知的教養を高める努力や経験をつみ、その育ちを待ち、是非とも美しい映像を受けて、ゆっくりと、じっくりとその良さを味わって欲しいと思う。

(4) 感性と知性の関係

美は、感じ取るものであるから、直接的には感性が関与することは疑いようのない事実である。しかし、その享受の質を高め、高い美的体験や境地に至るためには、感性だけでは1つの限界があることを知る必要がある。

例えば、1つの絵でも、文章でもかまわないが、若い頃、その絵なり、文章を自分なりに見、そして読んで感動し、感激し、芸術的解釈や文学的解釈をして理解していたつもりでいたのに、その後、いろいろな学習や旅行や邂逅などの人生経験を経て、改めてその絵や文章に出合った時、実にいろいろな感慨をそれらの作品にいただいた経験がないだろうか。人によっては、若い時と同じ感動や感激をおぼえる人もいれば、純心ではあったが、理解力のなさや意味の読取りの浅さに恥ずかしい思いをした人もいるのではなからうか。知性だけでも享受出来ないが、感性だけでも理想的な享受は不可能のように思われる。

感性を中心に、知性がそれを柔らかく包みながら鑑賞活動が行われる時、素晴らしい美の享受がなされるように思う。

(5) 鑑賞活動の特徴

a. 鑑賞は、美の発見活動である。

鑑賞活動は、もうすでに、名画や名作として評価の定まった作品だけを鑑賞するのではなく、大自然も含めて、あらゆるもの、あらゆる現象の中から美を発見し、発掘し、鑑賞することが出来る。また、美の鑑賞は、いつでもどこでも鑑賞出来るという特徴を持っている。しかし、現実には、だれでもが、いつでも、どこでも発見出来るという保証はない。美への感受性の強い人は多くの美を発見し、その享受が可能なのに、感受性の弱い人はわずかしか美が発見出来ず、享受の機会が少ないということがいえる。いずれにしても、美の鑑賞は、新たな美の発見活動であり、発掘活動でもある。

b. 鑑賞は、美の評論活動である。

鑑賞者は、決して美術評論家ではないが、鑑賞活動を続けていると知らない間に多くの作品と出会う結果になり、自分なりに他の作品と比較したり、分析したり、評論を行なっている。

そして、好きな作家や作品に出会うと、その作家について調べたり、研究したり、人によっては、その作家の作品を手に入れたいと思うようになる。どうしても手に入れられない時は、画集やカタログや絵葉書を購入したり、撮影の許される所ならば写して来、その後現像し、写真とし、それを改めて見、再び鑑賞することになる。

また、最近では、カルチャーセンターとか文化教室とかが盛んで、多くの造形にたずさわるアマチュア造形者が輩出している。全く実技をしていない時の物の見方と、少しでも実技をしている時では、物の見方がちがって来る。やはり、実技をしている人の方が見方が鋭くなって行くと思う。だから、1人で鑑賞している時ならいざ知らず、数人で鑑賞しようものなら、その評論はすさまじく、ああでもない、こうでもないと美術評論家顔負けである。

人は、口に出す、出さないは別として、心の中で知らないうちに鑑賞活動と同時に評論活動をも行なっているのである。

c. 鑑賞は、ある種の創作活動である。

造形者が、鑑賞活動において度々経験することだが、展覧会会場で鑑賞すると相当の疲労を覚える。この疲れは、会場を歩いた距離に対するエネルギーの消耗や物を見たがために生ずる目の疲労だけによる疲れではないことを経験の上から知っている。

これは一体何を意味しているのだろうか。それは、造形者が、美の鑑賞をしながら、目に見えない筆を持ってキャンバスに色を塗ったり、パレットナイフで削り取ったり、その上にまた新たに色を塗ったりしているのである。

また、ある造形者は、目に見えないのみと槌で、目に見えない石や木を一生懸命彫刻しているのである。

このことは、1枚の絵を鑑賞することは、1枚の絵を描くことに等しく、1つの彫刻を鑑賞することは、1つの石や木を彫刻し、作品に仕上げに行くことに等しいのである。

一般の人も、造形者程の具体的な、ある種の創作活動を行わないまでも、小さな創作者となり、ある種の小さな創作活動を行なっているのである。

今、エピソードとして私の体験を紹介してみたいと思う。

それは、我々造形者には時々あることだが、急に制作意欲がなくなったり、何を描いたらいいのか分からなくなったり、悩んだりする通称「スランプにおちいる」という状態になることがある。そんな状態の時、先輩に事情を話したところ、先輩は次のようなことを話され、私を励ましてくれた。

「何も心配することはないよ。アトリエであれこれ考えているより、どこでも、何でもいい

美の鑑賞

から展覧会へ行って人の作品を見て来た方がいいよ。我々にとって、1枚の絵を見ることは、1枚の絵を描くことと同じなんだから……。」今まで、ただ何となく鑑賞していたのだが、この先輩の言葉に、造形者の鑑賞は、ただ単なる鑑賞ではなく、鑑賞は、ある種の立派な創作活動であることを強く思い知らされたのである。私はただただ、先輩の慧眼に恐れ入ったのである。

d. 鑑賞は、ある種のエネルギーの蓄積活動である。

我々は、多くの人生経験の中で、悲しかった時、苦しかった時、いやなことがあった時、途方に暮れていた時、心が空洞になっていた時など、美しい草花や愛らしい動物達や無邪気な子供の寝顔、美しい風景や音楽や映画や絵画などを見て、ある時は慰められたり、励まされたり、ある時は心が喜びで満たされたり、また、ある時は生きる望みを与えてもらったことがある。美は、人間に安らぎを与え、生きる勇気と力を与える力を持っている。鑑賞は、人間の心と体に、ある種のエネルギーを与えてくれる。鑑賞活動は、実は、美から発つある種のエネルギーを受け取り、それを心と体に蓄積する活動である。そして、その採り入れたエネルギーによってリフレッシュし、新たな生活と創造のために再出発するのである。

3 鑑賞の方法

(1) 直接鑑賞法

対象物を直接見、触れ、味わう鑑賞方法で、鑑賞方法の中で最高の方法である。しかし、現実には、なかなか現物に対面する機会が少ないのだが、出来るだけ現物主義、現場主義をつらぬく心構えだけは持ち続けたいものである。

(2) 間接鑑賞法

直接現物、または現場での鑑賞が最高ではあるが、経済的にも、地理的にも、その他いろいろな理由によってむずかしい場合が多いので、出来るだけ現物に近い物で間接的に鑑賞することになると思う。

しかし、最近は、印刷技術も秀れているし、模写や模刻にも素晴らしいものがあるので、ややそれに近いものでの鑑賞が可能になって来ている。また、ビデオやスライド、レーザーデスク、映画などの映像技術の進歩もいちじるしいので、これらを有効に利用することによって臨場感や現実感を味わうことも可能である。

(3) 個人鑑賞法

対象物の置かれている状況にもよるが、個人的にゆっくりと、心ゆくまで鑑賞出来たら大変幸せなことである。このような状態では、対象物との心の対話、心の交流、精神の高揚などをはかることが出来るので素晴らしいことである。

私ごとになるが、今程観光旅行が盛んでなかった頃、1人でシスティナ礼拝堂を訪れた時のことが忘れられない。

その日に限って何故か見学者が少なく、1人であのミケランジェロの「最後の審判」に出会うことが出来たのである。その時の感動と云ったら、本当に、筆舌につくすことが出来ないこととはこのことだと思った。ただただ、大壁面の前にぼう然と立ちつくすだけであった。

もしも、今のように見学者が沢山いて、自分がその見学者の行列の1人だったとしたら、勿論あの「最後の審判」が素晴らしい作品であることは理解出来たとしても、1人で出会った時の、あの感動と同一の感動を味わえたかどうか自信がない。

(4) 集団鑑賞法

各個人個人が、直接作品を見たり、触れてみる事が出来たら理想ではあるが、実際にはそういう訳にはいかない。

現実には、先生が、教室で作品を台の上にのせたり、図版を黒板にはったりして生徒や学生達に作品の鑑賞活動をさせる。生徒や学生達は、それを自分の席から先生の説明を聞きながら集団で鑑賞することが多いと思う。

また、最近では、映画やビデオによる鑑賞方法もあるので、1度に多くの方が鑑賞することも可能である。

デパートの会場や画廊や展覧会会場も集団で鑑賞出来る場所であるが、自分のペースや自分の気分のおもむくまま自由に鑑賞することは大変むずかしいことである。しかし、集団による鑑賞方法の利点もない訳ではない。例えば、自分1人だけの鑑賞では、自分の感動したり、感激したりする場面やケースがある程度決ってしまうが、他の人と一緒だと、必ずしも自分が感動したり、感激する場面やケースがその人と一致するとは限らない。なるほど、そんな見方もあるのか、そんな感じ方もあったのかと、他人から新しい見方や感じ方を教わり、新しい美を発見することだってあるのである。

(5) 屋内での鑑賞法

屋内での鑑賞は、天候によって左右されずに鑑賞出来るという利点がある。また、照明は勿

美の鑑賞

論のこと、室温や湿度も一定の状態にした状態で鑑賞出来るので、最も安定した鑑賞方法である。特に、絵画や工芸品など直射日光を避けなければならない作品の鑑賞は、どうしても屋内にならざるをえない。一方、鑑賞者の方も、天候やその他の状況に左右されることなく、ある一定の心理状態や環境で鑑賞出来るので安心でもあり、便利でもある。

(6) 屋外での鑑賞法

自然物や自然現象の鑑賞は、当然屋外の方になるが、彫刻などは、屋内よりも屋外の方が伸び伸びとして自然の中にとけ込み、より一層の鑑賞効果を上げることもある。

ただ、屋外の場合は、風雨や風雪、日照時間などによって鑑賞の時間の制限などがあるため、屋内に比べたら不自由な面も多々あるが、自然そのものの鑑賞ならば、時間により、季節により、場所により刻々と変化する自然そのものが鑑賞の対象になるので、それはそれなりの価値があり、素晴らしい美の対象物だと思う。

このように、人間が屋外に出て自然と対座することによって、生きていることを実感したり、人間の心のせまさやずるさ、はかなさなどを知ったり、自然の心の広さ、豊かさ、大きさ、深さなどを知って、はずかしくなったり、ある時は勇気づけられることもある。本当に自然は悠然とし、あらそわず、寛大であると思う。所詮人間は、大自然の中の一存在にすぎず、弱いくせに傲慢で、あらそいが好きで、許すことの嫌いな、自己主張の強い生き物である。だから、もっともっと、自然をゆっくりと鑑賞し、多くのことを学び、心を豊かにし、自分に対しても、他人に対しても優しくしてあげられたらいいと思う。

(7) 感性だけによる鑑賞法

予備知識を得た後や、研究をした後に鑑賞する方法もあるが、知識や研究もせず、感性だけをたよりに鑑賞することも素晴らしい鑑賞方法の1つである。

勿論、第1印象によって正しく、深く鑑賞出来る保証はないが、誤った知識やいいかげんな先入観による中途半端な鑑賞よりは、感性だけをたよりにした鑑賞方法の方がより良いと思う。

人間は、多くの経験をつんだり、多くの人生経験をしているうちに、人間的にも巾が出来、心の読み取りや深い洞察力も身につけて行くにちがいない。そのような状態になってからでも遅くないので、まず最初のうちは、とりあえず自分の感性を信じ、自分の感性に従って鑑賞していったらいいと思う。

(8) 収集及び分類作業による鑑賞法

多種にわたる作品を、時代別、作者別、モチーフ別、技法別、材料別、地域別、民族別、題名別、個人の嗜好別などによる収集及び分類作業は、整理後の鑑賞はいうに及ばず、収集や分類作業そのものが鑑賞活動となるのである。即ち、作業することによって、知らず知らずの間に好むと好まざるにかかわらず、多くの作品を目や手で、時には耳で知り、鑑賞活動をしているのだ。

この鑑賞方法は大変魅力的で、効果的な鑑賞方法だと思う。理屈ではなく、体験を通して学習出来る鑑賞方法であるので是非多くの人にすすめたいと思う。

指導者は、出来るだけ自然に収集や分類に興味を持たせ、自主的に行動をおこさせるように導入していくと、鑑賞者は作業に熱中し、新聞や雑誌、時にはチラシやパンフレットの中からもさがして集めて来る。そして、その資料を選択する段階で、自分なりに、美とは何か、また、この資料が収集に値するかどうかなど自分で判断しなければならないので、自然と美の選択眼や判断力がみがかれていくことになる。

いかに収集や分類や整理が楽しいか、それはあたかも、切手やハンカチや昆虫などのコレクターの心理にも通ずるので、その心理をうまく利用して美のコレクターに育てて行くと素晴らしい鑑賞者に育てて行くと思う。

(9) 比較検討による鑑賞法

収集及び分類作業による鑑賞法をもう一步進めた鑑賞法に、比較検討による鑑賞法がある。

例えば、1人の作者の作品の中にも、無名時代の作品、有名になってからの作品、そして晩年の作品という風に、時代別に比較し、その時代時代の作者の心境の変化がどのように作品に表われているか、また、作者が、その時代時代にどのようなことに感動し、それをどのように表現していったかなどを研究してみることは、ただ単に研究だけにとどまらず、楽しみながら芸術の本質をも理解することになるので大変有意義だと思う。

その他にも、地域や民族のちがいや、男女などの性別によるちがいや、作者の気質や性格のちがいによって作品への表われ方がちがうこととか、いろいろ自分なりにテーマを設けて比較検討したら面白いと思う。

(10) 歴史的背景分析による鑑賞法

美の鑑賞というと、美術史を連想する程、名画、名作と鑑賞の関係は密接である。事実、作品は、作者の思惑とは別に時代の申し子達であり、時代の背景を抜きにしてその作品を語るこ

美の鑑賞

とが出来ない。歴史的背景を理解することによって、ますます作品の理解度が深まって行く。そうすると、この作品は、生まれべくして生まれて来たのだなあと思う。時代が、その作品を要求していたのだとも思えるし、また、その作品は、その時代だからこそ生まれたのであって、もしも時代がちがっていたら、その作品は生まれてきたかどうかさえ分らないのである。

こういう見方や考え方で鑑賞していくと、作品というものは、偶然性と運命性をになって誕生して来たことがよく分かって来て、なお一層のいとおしさと愛着がわいて来る。

事実、同時代に生まれた名画や名作でさえ、宗教上の理由や政治的理由や自然災害や盗難などの理由によって失われたことを、我々は史実として沢山知っている。それらの作品は、幾多の試練や災難などからのがれて、やっと思いで生き残った、運の強い作品達なのである。

私達は、作品を鑑賞するだけにとどまらず、作品を保護し、維持し、保存して行くと同時に、作者への思いやりや作品への理解を示し、一時的な感情や思想でもって、作品を燃やしたり、壊わしたり、無視したり、攻撃するような愚かな行動をとらないように、日頃から教養を高め、心をみがき、優しい心で作品に接していくように心がけたいものである。

(11) 風土的背景分析による鑑賞法

動物や植物が、気候や風土によって分布や成長過程が異なることを知っているが、人間もまた、気候や風土によって、肌の色や目の色、体格、物の考え方、感じ方、習慣、人生観などが異なることを知っている。

当然、人間の精神の産物である芸術作品もまた、その風土的要因の数々の影響を受けて誕生することになる。

暖かい、光に満ちた国の作者の作品と、寒く、長い間雪にとざされている国の作者の作品とでは、色の使い方、物のとらえ方、明暗の表し方などの表現方法が異なることに気がつく。所詮、人間は環境によって左右される生き物だからやむを得ないが、風土的背景を考えながら研究をしたり、鑑賞してみると一層興味深い鑑賞活動を体験することが出来る。

(12) 作者を中心とした鑑賞法

基本的には、作者の手をはなれたら、作品は1人歩きをするものだが、作者があつて作品がある訳だから、作者について調べてみることは鑑賞を深めていく上で重要である。

例えば、作者の生いたちや育った環境が、本人が意識するしないにかかわらず作品に出て来るし、技法やえのぐの選択や色の好みなどにも色濃く出て来る。

また、作品が生まれるきっかけになったエピソードや、本人の生きざまや、作品そのものの

現在に至るまでの経緯や歴史をひもとくことによって、ますます、その作品に共鳴したり、愛着を抱いたりする。

いずれにしても、作者の性格や感じ方や考え方が色や形となって作品に表われ、それがその作品の個性なり特徴となり、作風となって存在する訳だから、作者を中心とした鑑賞では、作者の数だけの個性と生きざまに対面することが出来ることになる。

(13) 材料を中心とした鑑賞法

作品を、芸術的面や精神的面からだけではなく、材料や用具などの物質的面から研究したり、鑑賞する方法がある。

例えば、同時期に二つの仏像が作られたとしても、その二つの仏像の材料が異なるとその出来上りは当然異なったものになる。即ち、作者は、その材料に最も適した技法で、その材料の最も素晴らしい特質が出るように工夫し、苦勞し、努力して制作するからである。

また、その地方やその国に産出する材料によっても作品がちがってくる。質のよい木材の産出する所では木彫が発達し、良質の石材の産出する所では、自然と石彫の作品が多くなる。

作品を、芸術的面ではなく、物質的面からみることによって、表現方法や作者の技法以外に、その時代の要求や経済や政治の流れや人々の生活様式などが分かり、また、ちがった感慨を作品から受けることが出来、ちがった楽しみが増えて来ることがある。

(14) 技法を中心とした鑑賞法

作品は、ある材料を用い、ある種の道具を用い、ある種の技法を用いて制作され、完成して行く。

作品の解説や説明ならば、その技法を知識として紹介することが出来るが、本当に、人々にその技法を理解させ、伝えることはなかなか困難である。具体的に分かってもらえるように伝えて行くには自分自身も体験してみたり、作者が制作している所を見学させてもらったり、多くの作例を沢山見て目をこやしたり、多くの経験を沢山つむことが大切である。そうしないと、なかなか自分も納得しないし、人を納得させることも出来ない。

分野にもよるが、他人に自分の技法を見せることをいやがる作者が結構多い。特に伝統的制作用分野では、今だに文字や記号として記録せず、口伝によってしかその技法を伝授しないという所もある。だから材料や用具などは分かっているが、どのようにして制作されたのか今だにその技法が解明されていない作品も数多くある。それは今後の研究に待つこととし、とも角技法を中心とする鑑賞法は大変むずかしいのだが、やりがいのある鑑賞法であることにはまち

美の鑑賞

がない。そして、技法上の理解が進むにつれ、作品の保存方法や展示方法にも目が向き、真の芸術作品の理解者へと変身していくのである。

(15) 模写、模刻、模作などによる鑑賞法

鑑賞方法を、より確実に、より実感的に体験させる鑑賞法に模写や模刻や模作がある。

名画や名作は、有名な作者や天才といわれている人達の作ったものであるから、普通の人が簡単に制作することむずかしい。しかし、まねて作ることは可能である。厳密にいうと、そこに至るまでの経過や技法、そして天からの啓示やひらめきなどは追体験することは不可能であるが、どのような時代に、どのような状況下で、どのような材料や道具を用いて制作したかなどは、ある程度科学的分析や歴史的な分析や研究によって明かになっているので、それらの分析や理解のもとに制作を試みることは可能である。

この鑑賞法は、他の鑑賞法が目と頭脳を使った方法だとすると、この方法は、目と頭脳と手と体を使った方法で全身で体験することの出来る鑑賞法なのである。

最も具体的であり、説得力もあり、教育的効果の大きい素晴らしい鑑賞方法である。

(16) 制作活動の中での鑑賞法

作者は、1つの制作のために、観察をしたり、感動をしたり、写生をしたり、それをもとに小下図や大下図を作りながら本制作へと入って行く。一般的にはこのようなプロセスを経ながら、創作的エネルギーを蓄え、それを本制作のキャンバスや木などにたたきつけて行く。

短い時間で一気に仕上げに行く場合はそれ程問題にはならないが、長い期間を要する場合には、制作と鑑賞を繰り返しながら続けて行く間に、行き詰まったり、迷ったりすることが度々ある。そういう時には、今までの写生や下図をもう一度見直したり、他の作品の鑑賞をしたり、時には、写生した物に直接触れてみたり、見る角度を変えてみたり、風景画の場合などは、もう一度その場所へ出かけて行って再度写生を試みたり、その風景を初心にかえって鑑賞したりする。そうすることによって新しいエネルギーをとり込み、迷ったり、悩んでいたことの解決をはかり、勇気と自信をもって、もう一度制作に立ち向かって行くのである。

このように、制作活動の中では、制作と鑑賞が交互になされていくので、制作活動も立派な鑑賞法の一つである。

(17) 音や光を利用した鑑賞法

大自然の場合は、多種多様な美を提供してくれるので、人間の方が適当に、自由に鑑賞すれ

ばいいのだが、多くの作品の中には、当初あった場所ではなく、諸事情によって、美術館や博物館の陳列ケースの中にある場合が多い。

理想的には、その作品が置かれていた場所に持って行って、そこでその作品を鑑賞した方が最良なのだが、現実にはそういう訳にはいかない。現在置かれている環境の中で、最大限にその作品の美しさを引き出してやる必要がある。そのために、その作品にふさわしい照明や音響効果を考え、研究をし、実験をして、最良の方法でもって展示し、鑑賞していったらいいと思う。

(18) 視聴覚機器を利用した鑑賞法

科学的進歩に伴ない、現在では素晴らしい視聴覚機器が沢山あるので、本物にはかなわないまでも、これらの機器を上手に利用することによって鑑賞効果を上げることが出来る。

最近、数社が共同で開発している「マルチメディア」が一般に普及するようになったら、教育界のみならず鑑賞界にとっても朗報である。映画のような大画面の効果は得られないが気軽に名画や名作に接することが出来る利点がある。

しかし、どんなに便利で、機能的に秀れた機器が開発されたり、発明されたとしても、鑑賞活動は、現物及び現場が原点であることを忘れてはならない。

参考文献

- ・今道友信：美について 1973 講談社現代新書
- ・川上 実：美術教育の方法 1985 玉川大学出版部
- ・野島光洋：美術鑑賞の授業 1989 明治図書
- ・玉川百科大辞典：造形芸術 1960 玉川大学出版部
- ・小松省三：造形教育者の条件 川村短期大学研究紀要 第10号 1990 229～235
- ・教師用指導書：美術 1972 光村図書出版